

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2011年7月11日（月）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：政軍関係から見るインドネシア政治

——発展途上国におけるシビリアン・コントロールの問題

報告者：増原 綾子（亜細亜大学国際関係学部専任講師）



平和と安定、民主主義を志向する国家にあつては、軍事力・軍隊の統制は普遍的な問題である。いかにしたら、軍が統治権力を握らないように、政治に影響力を行使しないようにシビリアン・コントロール（文民統制）を確立できるか、発展途上国における政軍関係を比較政治学の視点から考えてみたい。

発展途上国では、文民政治家による政権運営の失敗で、しばしばクーデターが起きて軍事政権が誕生する。それにはいくつかのタイプがあるが、インドネシアのスハルト政権は「個人支配へと変化」したタイプと言える。軍隊で「同輩中の第一人者」が大統領になり、次第に権力を集中し、大統領が軍と党のコントロールに成功し、長期的政権を実現した。以下、インドネシアにおける政軍関係の変遷を辿りながら、シビリアン・コントロール確立を模索する過程を分析してみる。

インドネシアの国軍は独立宣言後に寄せ集めで形成されたが、オランダとの独立戦争を経て、「独立を勝ち取ったのは自分たち、国軍である」との自己認識を持つにいたる。この認識は後に、軍は国防治安機能のみならず政治社会機能も担うという、「二重機能」ドクトリンを生むことになる。さらにこのドクトリンは、国軍出身のスハルトが政権を担当するようになると、軍の政治への関与を正当化することにもなり、結果的にスハルト長期政権を可能とする要因のひとつとなった。スハルトは人事

政軍関係から見るインドネシア政治—発展途上国におけるシビリアン・コントロールの問題(増原 綾子)

(軍内昇進等および政務ポストへの任命)や資金調達(予算外資金やビジネスによる)を通して、国軍を巧妙にコントロールした。また、与党ゴルカルを設立して軍のベテランを党幹部に据えて、党の政府への従属を確実なものとした。

しかし、政権が安定するにつれて与党ゴルカルと国軍の距離が次第に離れた。スハルトもゴルカルを権力継承の道具として考えるようになり、軍に対しては軍幹部が常に対抗関係にあるような人事政策をとった。その結果、1998年政変においては、ゴルカルからは反スハルト・グループが出現して民主化勢力と連携して、政権を担うようになった。一方、国軍は内部分裂で一致・一貫した行動をとれず、スハルト辞任後は守勢に転じるようになった。

ポスト・スハルト期には大統領が短期で交代する中で、政軍関係は不安定となる。軍の統制をめぐる制度・ルールが欠けているがゆえに大統領に軍の統制に関わる権限が集中するという構造的問題に加え、民主化の中で軍は組織的利益を守るために以前よりも自己主張するようになっていた。さらに、政治的不安定から軍内では権力が改革派から強硬派へとシフトして、軍自身による改革は難しくなっていた。しかし、そのような中でシビリアン・コントロールの新しいルール作りが模索された。議会では軍に関する法が改正され、大統領による一元的統制から、法・制度に基づく多元的統制への法的根拠が確立された。スシロ・バンバン・ユドヨノ政権になってガバナンスが改善されて、政軍関係にも変化が現れた。

この意味でも、1998年の政変では、政治体制はドラスティックには変化しなかったが、長い時間をかけて民主化への制度的改革が行われたと言える。

(文責：小林 寧子)